

〈報告〉

対話を基本とした美術作品鑑賞と表現活動実践報告

～子供・大学生・高齢者の事例から～

田中梨枝子・谷 悟

1 はじめに

近年、日本の美術館・博物館において鑑賞者の育成は使命の一つとされる。平成二十年度の文部科学省学習指導要領改訂をうけ、美術・博物館は一般来館者向けプログラムに加え、学校との連携という目標も課せられるようになった。鑑賞分野についても同様で、一般来館者を対象としたワークショップをはじめ学校教員の研修等が各館で実施件数が増加傾向を示している。しかし鑑賞教育については学校連携による小中学生を対象の事例報告が多く、その他の世代が少ないという対象年齢層の偏りがみられる。

そこで、本稿は鑑賞教育の中で世代別に実施した調査事例を報告するものである。昨年度に小学生、大学生、高齢者という3つの世代を対象にそれぞれ鑑賞プログラムを実施した。プログラム内での鑑賞時の発話内容と鑑賞から表現活動に至るプロセス、さらに表現活動の成果物を記録した。鑑賞する題材は神戸ゆかりの美術館¹が収蔵・展示する作品を用いた。鑑賞の手法には「対話を基本とした美術館賞」を適用し、ファシリテーターは田中が担当した。以上の記録から各世代の美術作品鑑賞の特質を探り、これからの鑑賞プログラムの質的研究の手がかりとしたい。

2. 美術館における教育普及の課題

2-1. 教育普及事業の実際

子供を対象とした教育普及プログラムは、日本各地の美術・

博物館で実施されている。特に日本の美術館では現在、次世代の鑑賞者育成を目的とした教育普及事業が盛んである。子供を中心とした教育普及事業は年々増加傾向をしめし、今や飽和状態に近いといえる。さらに利用者側からは、子供のみならず大人も楽しめる企画を望む声も高まっている。このことから今や美術館の教育活動は幅広い世代に対応した生涯学習の機会を継続的に提供することが求められる時代に入ったといえる。

2-2. 対話を基本とした美術作品鑑賞とは

田中は2007年9月から2015年3月まで神戸ゆかりの美術館（以下 当館）の学芸員として勤務、教育プログラムの企画・実践を担当した²。様々なプログラムの中で世代によるアプローチの違いが特徴的な活動があった。それが本稿で報告する鑑賞手法の一つ「対話を基本とした美術作品鑑賞」である。対話を基本とした美術作品鑑賞は、啓蒙・解説型の鑑賞に対して、新たな方向性を生み出した鑑賞法といえる。個人的経験や見解が重視される点において、美術に関する知識がなくても気軽に参加できる事で知られる鑑賞法である。この鑑賞法については主に小学生や幼児など子どもに向けて実践した先行研究が多く、是非をめぐる議論は今も続くが、美術鑑賞事始めの手法としては有効であるといわれている。神戸ゆかりの美術館においても対話を基本とした美術作品鑑賞については最初小・中学生や親子を対象に行っていた。この手法を採用した理由は、子供ならではの視点や発想を鑑賞の過程に生かすこと、また親子で美術作品を身近に感じてもらう活動に適していると考えたためである。さらに対話を基本とした鑑

賞については、高齢者たちを対象とした実践についても、過去の回想から作品へ心を寄り添わせる事例として拙稿³にまとめており、現在も研究を継続中である。

2-3. 世代による鑑賞の違いについての仮説

高齢者の事例分析においては、美術作品鑑賞には作品理解以外にも自己肯定感を強めたり、他者との繋がり意識や感動の共有といった要素を見つけることができた。また高齢者たちは、鑑賞を行う中で人生を振り返り自己を肯定する時間を過ごしていたことがわかった。つまり鑑賞の場は高齢者たちにとって人生において身に着けた「生きる力」を存分に発揮できる場であることが推察された。これは子供のみにも有効とされていた対話を基本とした美術作品鑑賞の可能性の広がりを見せさせるものであった。

しかし、以上の研究は子供と高齢者の活動の比較を通して分析を行ったものであるため、2者のみの比較では情報不足であることは否めない。そこでほかの世代の鑑賞とも比較検討することを次の目標とした。以上の経緯から、本稿では昨年度の実践事例3件を調査報告する。神戸ゆかりの美術館の収蔵・展示作品を用いた鑑賞において各世代にどのような特徴がみられるのか、また鑑賞を終えた後の表現活動から、彼らが何を学び得たのかを探る手がかりとしたい。

3. 世代別実践事例1—子供の鑑賞と表現—

3-1. 概要

「ゆかり親子ミュージアム2[わたしの旅絵日記づくり]」

日時:2014年7月26日, 8月30日, 9月26日 10:30~12:30

場所:神戸ゆかりの美術館展示室および多目的室

ねらい:郷土作家の作品に親しむ。鑑賞で見つけたこと、感じたこと、考えたことについて話合う。今日の気持ちを大切に、描画・工作の活動を楽しむ。

参加者数:19名

対象:小学生とその家族

3-2. 活動の流れと内容

	学習活動・内容	○指導上の留意点 ★評価のポイント	使用した資料
導入	スタッフ事項紹介・アイスブレイク・活動の流れの説明・美術館での約束確認(15分)		
鑑賞	学芸員がファシリテーターをつとめ、対話を基本とした美術作品鑑賞。(20分) 【写真1】 【資料1】	○描かれた内容から、見つけたこと、気づいたことを話し合う。 ★人の意見を聞き、考えが変化したり、見方の違いに気づいたりできたか。	《資料》 金山平三「庭」、 古家新「フランスの田舎」、三木朋太郎「ヴェイトヨ風景」ほか
描画制作	ワークシートにお気に入りの作品を描く。(30~40分) 【写真2】 描いた絵を材料に工作を行う。(45~50分)	○今日のお気に入りの作品を見つける。 ★描画活動に鑑賞の内容が反映されているか、また工作活動でも言葉で伝えきれなかった発見や気持ちが表れていないか観察する。	
振り返り	作品発表会 がんばった点、工夫した点、一番気に入っている点などについて紹介する。	○鑑賞と表現、それぞれの良さを改めて振り返る。 ★自分と他人の違いや気づき、その良さを感じとる。	活動全体を通して参加者とともに経験した内容を振り返る。 鑑賞と表現、それぞれの活動において言葉がけが不足していた部分を補う。



【写真1】



【写真2】

【資料1】

親子ミュージアム 発話記録 9/27(抜粋)

鑑賞作品:金山平三《庭》

子供(C)「おしゃれ」「森が広がっている」「100年前とは思えない」「キツネがパン焼いてくれるところに似てる(『もりのパン

屋さん』という絵本の話)」「絵が小さい」

鑑賞作品:古家新《フランスの田舎》

C「お家のお庭みたい」

F「どうして(思ったの)?」

C「道があるから」

F「なるほど,家に続いて行く道なのかな」

鑑賞作品:三木朋太郎《ヴェトイユの風景A》

C「夏みたい」「ハイジお爺さんのお家みたい」

F「ハイジがいたところに近いから似てるのかもしれないね」

鑑賞作品:林重義《伊太利娘》

C「石の壁が崩れているみたい」「防空頭巾をかぶっているみたい ちーちゃんのかげおくりで習った」「表情は笑っていないもんね」

母「おしゃれな額がたくさんあるんですね(ここまで見てきて)これは作者のこだわりなんですか?」

F「そうですね,画家がこだわる場合もあります」

鑑賞作品:関口俊吾《南仏サントロペ》

C「冬(木が枯れている)」「人、ピン?」「建物と比べると人がやけに小さい」「人が座っている?」「すごく遠くから描いているのかもしれない」

鑑賞作品:関口俊吾《Revenel》

F「これが油絵です」 C「ベトベトしてる」

鑑賞作品:坂本益夫《街角》

C「曇ってる」「車がある」「HOTELっていう文字が書いてあるからホテルなのかな」「人が小さいからすごく大きい建物」「変なドアがある」

鑑賞作品:西村功《エッフェル塔を望む》

C「パリ、エッフェル塔よりスカイツリーの方が高いよ」

3-3. 鑑賞所見

自身の経験と比較しながら見る。身近なものと比較しながら見る。絵の世界に入ったつもりで、空気やにおい、音、気温、風の流れなどについて五感を使って感じとっていた。親子の会話、ファシリテーターと子供、ファシリテーターと親など、その場にいた人々との会話も見られた。

3-4. 表現と鑑賞のかかわり

その日気に入ったものを見つけるので、会話で出た話とつながっている場合もあれば、つながっていない場合もある。また子供自身の経験が現れる場合と、経験をもとにイメージを膨らませた場合が見られる。

4. 世代別実践事例2—大学生の鑑賞と表現—

4-1. 概要

課題名:「西田真人さんの絵本を作る」

日 時:2014年12月~1月

2限10:50~12:20, 3限13:20~15:50 (全5回)

場 所:本学芸術計画学科9-406教室

ねらい:日本画家の描いた作品を鑑賞し、作者の気持ち、表現したかったことを感じ取ること。その後自分たちの鑑賞を生かした絵本を作成する。読み手が作者に親しみを感じられるような絵本を作成する。

参加者数:5名

対 象:博物館教育演習履修生

学習時間:900分 (10コマ)

4-2. 活動の流れと内容

	学習活動・内容	○指導上の留意点 ★評価のポイント	使用した資料
導入 課題説明(20分)・学習の流れの確認			
鑑賞	教員がファシリテーターをつとめ、対話を基本とした美術作品鑑賞を行う。(40分)	○描かれた内容から、作品が描かれた背景や作者の意図・主題に気づく。 ★作品を味わう、対話を基本とした美術作品鑑賞を楽しむ。	《資料》西田真人「廃屋」「輝く街」「光のアーケード」ほか
調べる	作者の画歴や制作背景、日本画技法などについて文献等で調べる。絵本の作り方、形状や構成について他の絵本を参照して計画を立てる。(120分)	○鑑賞経験に基づき、制作物に必要な情報を集め整理する。グループで情報を共有する。 ★情報を整理し作品・作者について必要な情報を判断し、さらに自分達で調べられたか。	《資料》結城昌子『小学館あーとぶっく⑫ モディリアニの絵本 あえてよかった』ほか

原稿作成	全員で掲載作品選定(90分) 【写真3】 グループで原稿と、レイアウト班に分かれ作業を進める。(360分)【資料2】	○子供に適切な言葉遣いと内容であるのかを確認するよう促す。 ★役割分担が明確か、子供についての理解や言葉遣いへの配慮ができていますか。	
編集	オペレーターにレイアウトの指示をする。(180分)	★イメージしたレイアウトについて、オペレーターに正しく伝えられているか。	
振り返り	おススメパネル制作。 完成した絵本について、制作者からのメッセージパネルを作成。(90分)	○読み手への伝えたいことを明確に、年齢にも配慮して制作する。 ★自分たちの制作物を責任を持ってつたえようとしているか。	
神戸ゆかりの美術館の絵本コーナーに制作した絵本を設置。(2015年1月～3月)			



【写真3】

【資料2】

『西田真人の絵本』(原稿より)

1.《こもり》

カラフルな風車 とってもかわいいね おばあちゃん 誰と遊ぶのかな?

2.《暮れゆく街》

あっ!! ポートタワーだ!! 大きなイヤリングの女の人が 外を

見ているよ 誰を待っているのかな?

3.《光る海》

夜明けの街 みんなまだ寝てるのかな? ポー おーい! お船はどこへ(部分拡大) 向かっているんだろう…

4.《昭和の記念碑》

ドンドン ガー 煙モクモク 何をしている場所かな? モクモク煙がでていよ 赤い管もいっぱいあるね 鉄の匂いがしてきそうだ

5.《PARTY》

よちよち可愛いペンギン スラッとかつこいい黄色いペンギン おなじペンギンだけどみんな違うね 君はどのペンギンが好き?

6.《風の音》

電信柱が曲がっているね 何があったんだろう みんなどこへ行っちゃったのかな? おーい!だれかいませんか? 耳をすませてみよう 何かきこえる?

7.《倒壊》

こんどは夕焼け空だ! 太陽さんおやすみなさい ここはどこだろう? 色んなものが落ちているね なんだか大きなお船みたい(イラスト)

8.《黒いアーケード》

きれいな青い空! ここにも誰もいないなあ どの色かわかるかな?(部分拡大3か所)

9.《光のアーケード》

真っ赤! 電気(イラスト)がたくさん!

10.《白い壁》

ガレキのお家? あ!十字架がある! 教会だったみたい 白い壁がはがれてポロボロだね 頑丈そうなレンガも まるで積み木みたいに崩れてる…

11.《レクイエム》

羽のはえた天使かなあ 背中黒いモヤモヤ(イラスト)がなんだか不気味 あなたはだあれ? 何を思っているの?

12.《祈り》

きりっとした顔 手を合わせてるよ この子は2才の聖徳太子なんだって!

13.《夜に舞う》

赤や黄色に輝くブランコ ぴかぴか(イラスト) とってもきれ
い! みんなぐるぐるまわってる とっても楽しそう!

14.《白い垣根》

こっちは太陽の光! 誰かが歩いているね
どこへ行くのかなあ(イラスト)

15.《輝く街》

月も建物も海も船も観覧車も みーんなきらきら輝いてる!
耳をすませてごらん 神戸の街のにぎやかな声が聞こえてく
るよ!

4-3. 鑑賞活動所見

鑑賞時には意見が多く出たとは言えない。しかし言葉数は少ないが、作者の製作意図に寄り添う感想は見られた。自分が意見を言うことについて、履修生同士の人間関係性や、発言すること自体への恥ずかしさもあって沈黙も目立った。時間がたち鑑賞に慣れてくると、自分なりの感想を言えるようになるが、やはり周囲との協調性を優先させようとするので発言姿勢は遠慮がちであった。その後の絵本制作において、小さい子供を対象にするという条件が付くことで、自分なりの考えを原稿に反映させている姿が見られた。

4-4. 表現と鑑賞のかかわり

五感で楽しめるような言葉がけや子どもの発達段階に合わせた鑑賞の提案が見られた。音・匂い・季節・時間・天候・登場人物の気持ちなど自分達が鑑賞経験をもとに質問を作った。また子供を飽きさせないように途中でイラスト(7.11.13.14.)や擬音語(3.4.11.13.)、クイズ(8.)を入れた。神戸の震災をテーマに描いた作品をどう伝えるか迷い、あまり悲しい内容にしないよう掲載作品点数を調整する姿が見られた。さらに聖徳太子(12.)など子供に親しみがない画題をどう伝えるか相談する姿が見られた。結果、親子の会話の材料になるようにとの意図をもってあえて記載した。絵本を通した親子関係への配慮が見られた。

完成した絵本について、当館の60代事務職員(男性)から

以下のような感想がよせられた。「西田氏の日本画は見慣れて
いたが、絵本を見て新鮮な思いがした。若い人の感性は自
分の視点と異なり興味深い」。当館利用者と同世代の職員
の意見は、大学生と高齢者との関係性も感じさせるものであ
った。残念ながら今回の調査で読み手の感想を充分集めるこ
とができなかった。絵本の検証については今後の課題とした
い。

5. 世代別実践事例3—高齢者の鑑賞と表現—

5-1. 概要

「神戸ゆかりの美術館でギャラリートークを体験」

日 時:2015年11月21日 10:00~15:00

ねらい:「対話を基本とした美術作品鑑賞を体験し、美術
作品を味わうとともに、美術館の楽しみ方を知る。ま
た事前学習した日本画の線描技法について本物の
作品を見て、技法の特徴を知る」

参加者数:29名

対 象:神戸市シルバーカレッジ美術・工芸コース1年生

学習時間:300分

著者以外の講師:勅使河原君江(神戸大学大学院人間発
達環境学研究科講師)、田島菜摘(元
神戸ゆかりの美術館学芸員、学芸員②)

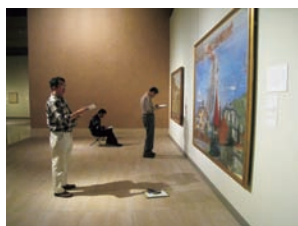
5-2. 活動の流れ

	学習活動・内容	○指導上の留意点 ★評価のポイント	使用した 資料
導 入	美術館の紹介・活動の流れ・美術館の約束の確認(20分) 活動内容の理解と約束の確認		
鑑 賞 ①	学芸員①がファシリテーターとなり対話を基本とした美術作品鑑賞で常設展示作品を見学。(20分) 【写真4】 【資料3】	○鑑賞の楽しみを知る。描かれた内容から、神戸の歴史、描かれた時代の記憶などを手がかりに作者の意図や主題について考える。 ★グループ内で活発に意見交換ができたか。	西村功「ポートアイランドと神戸」、小松益喜「桃色の家」
1~3班に分かれ、鑑賞①~③をローテーションで			

鑑賞②	学芸員②の解説で特集展示「昇外義～線を紡ぎ生命を宿した日本が世界～」展を見学。(20分)	○事前学習で臨本の経験の思い出し、本物と比較する。 ★本物の作品でしか味わえない魅力や特質に気付けたか。	昇外義「布引の滝」、「菩薩」ほか展示作品
鑑賞③	グループで館内全体を自由見学。(20分)	お気に入りの作品を探す。	
	昼食休憩		
模写	気に入った作品を1点選び色鉛筆を用いてワークシートに模写を行う。(60分) 【写真5】	個人で選び、個人で実現する活動。 ★自らの感動をもとに作品を選び模写をできたか。	
講評	学生の作品を講師が数点を選び紹介する。選んだ理由、工夫した点、苦労した点などを発表。(30分)	○自分の制作を振り返ると共に、他人との違いに気付き、それぞれの良さについて考える。 ★美術作品鑑賞について理解が深まったか。	



【写真4】



【写真5】

【資料3】

2班の発話記録(抜粋)

鑑賞作品1 西村功《ポートアイランドと神戸》

ファシリテーター (F):「みなさんの意見から探っていきましょう、何が描かれていますか?」

学生 (S):「異人館、市章山、市電(地下鉄)、須磨のロープウェイ」「いいとこどりやなあ、観光PRの絵」「フェリーターミナル、ふとうのところやなあ」「この頃は株式会社神戸市と言われていた」

F:「その頃の神戸の事を教えてください」

S:「現在と未来のかけはしが道路なのでは?未来への橋渡し」
「タイトルをみると《ポートアイランド神戸》だから、まだポーアイ

を神戸とっていなかったんちゃう」「この絵は依頼されて描いているから神戸の力強さとか、未来の発展を描こうとした」「神戸の灘の酒蔵も入れて欲しいな」「真ん中に道を入れるのは構図がすごい、勇気がいること」

鑑賞作品2:小松益喜《桃色の家》

F:「これも北野ですね」

S:「電柱がおかしい、電線もない、塗られている」「左の建物は朽ちるまでは行ってないけれど、空き家っぽい」「時間が止まっているみたい」「人の暮らしの気配はない、さびしい」

F:「もしもこの場に入ってみたとしたらどうでしょう?」「音はしない(人が居ない)」「晩秋?早秋?ひつじ雲がでている」

S:「建物の汚れが目立つ」「なくなっていく街角を描いている」

F:「でも《桃色の家》というタイトルを聞くと、明るいイメージですよ」

S:「北野にある普通の家だったんじゃないのかな」「やはり悲しいな、昭和の悲しい思い出」

5-3. 鑑賞活動所見

自分の経験と知識を照らし合わせて作品を鑑賞する姿が見られた。特に神戸の歴史に関連する部分は、制作年を手掛かりにその当時の社会状況と比較して見ていた。その時の自分の状況を回想しながら作者の心に共感するような発言も見られた。

5-4. 表現と鑑賞のかかわり

鑑賞において、自分の感覚で見るということに慣れたこともあり、各々が自分なりに気に入った作品を探す姿が見られた。また事前学習において実践した日本画特有の線描写に思い入れが強い学生割合も多かった。本物を前に、再び繊細な線描写に挑戦する姿が見られた。模写の仕方として、講師からのアドバイスの影響もあるが、気に入った部分を拡大して描く、良いと感じた造形要素を抽出して描く等の工夫が見られた。この工夫から、その学生が作品のどこに注目したのかが端的にあらわされていた。

おわりに

小学生、大学生、高齢者の活動の記録からそれぞれ特徴的な要素が見えてきた。子供と高齢者は自身の経験と作品を比較しながら、結果的には自分自身を語る姿に共通点が見られた。高齢者の豊かな人生経験は作者の内面へ迫ろうとする深い洞察力へとつながっていた。一方子供の鑑賞にも生活経験が生かされており、とくに絵本のイメージや日常の生活が想像される発言が見られた。さらに大学生の鑑賞は前述の二者と異なる結果であった。子供や高齢者のそれと比較して彼らは周囲に気を配り遠慮がちであり、また生活経験が反映されている発言や、自分自身について語る場面も少なかった。しかし子供向けの絵本を作るという共通課題を持つことにより行動に変化が見られ、後の表現活動においては自ら感じたこと考えたことを元に表現を行う場面が見られた。すなわち子供の目線になるという条件を得て、はじめて彼らは自己の言葉で思いを伝えることが容易になったのではないかと推察される。

最後に調査結果から見えた世代による鑑賞の違いとその意味についての見解を述べ結びにかきたい。調査対象となった各世代の美術作品鑑賞は、鑑賞者の生活環境や彼ら自身の経験と心の状態が強く影響する点が共通していた。これまで美術館における鑑賞とは、作品理解の手法として語られることが多かった。しかし各世代の調査事例が示したのは作品を鏡ととらえ自己と対話する鑑賞の在り方である。そして世代により作品との向き合い方には差異が認められた。年齢によりアプローチが異なる事実は、すなわち自己との対話が永続的になされる鑑賞の可能性を示しているといえる。しかし、鑑賞した作品及び学習の目的の違い等の理由から、今回の調査事例を単純比較することは困難であり、まだ仮説の域を出ない。今後は作品選出と学習内容等の条件をある程度揃えた実践と分析を重ねることで年齢による鑑賞と表現の特質について探ることを課題としたい。

註

- (1) 2007年3月23日開館。神戸市が所蔵している美術品コレクションを軸として、地元美術家の作品約1,000点を所蔵。所在地:東灘区向洋町中2-9-1
- (2) 田中梨枝子。(2014)。郷土作家を顕彰する美術館-教育普及事業報告-(参加者の声から)。KOBE ARTISTS MUSEUM Collection, 神戸ゆかりの美術館
- (3) 田中梨枝子。(2011)。神戸ゆかりの美術館における高齢者を対象とした美術作品鑑賞についての一考察～生涯学習教材としての郷土作家作品の可能性を探る～。修士論文,神戸大学大学院人間発達環境学研究科

主要参考文献

- ・宮脇 理:福田隆真:福本謹一:茂木一司(2000)。美術科教育の基礎知識,建帛社
- ・ハーバード・リード。(2001)。芸術による教育,宮脇理:岩崎清:直江俊雄=訳,フィルムアート社
- ・上野浩道。(2007)。美術のちから教育のかたち 〈表現〉と〈自己形成〉の哲学,春秋社
- ・アメリカ・アレンス Amelia Arenas。(2001)。みる・かんがえる・はなす 鑑賞教育へのヒント,木下 哲夫=訳,淡交社